

# 火野葦平「蕎麦の花」論

—北九州の河童伝説をふまえて—

はじめに

火野葦平は、河童は昔から自分にとつては、文学ときりはなせない切実なテーマであったと述べていて、数多くの河童にまつわる、エッセイ、小説、童話などを書いている。河童小説を集めた『伝説』（昭和一六年五月、小山書店）『河童曼陀羅』（昭和三年五月、四季社）『河童』（昭和二八年五月、早川書房）や、エッセイ集『河童昇天』（昭和一五年四月、改造社）『河童会議』（昭和三三年四月、文芸春秋新社）など記せばきりがないほどだ。戦前から戦後にかけて河童の執筆はずっと続けており、葦平にとって河童という伝説の妖怪を主人公に物語を描くことは、ライフワークだったのであろう。さて葦平の弟の玉井政雄は、『兄・火野葦平私記』の中で、小さい頃よく父が葦平と弟に河童の話

をしてくれたことを次のように記している。

増田周子

兄や私が小学生のころ、父はふたりを寢床のなかに抱きいれ、狸やもんが、あや河童の話をする。父の河童は、左手を体内にひっこめると右手がどんどんのびるといふ奇妙なやつだった。人間がどこまで逃げても伸びた手が追いかけてくる。父はまた、たもろの話もした。（中略）手ののびる河童もたもろも、父の創作（フィクション）であったような気がする。父の話のおもしろさに釣られて、兄も私も「もっと、もっと」とせがむ。<sup>1)</sup>

さらに玉井政雄は、「父は高塔山の封じ釘の話もした」と述べる。葦平の生まれ故郷の北九州市若松にある高塔山には現在

でも、「河童封じの地藏尊」として親しまれている釘を背中に刺した地藏がある。「高塔山の封じ釘の話」とは、その地藏の由来の「河童駒引き伝説」のことである。この地方に伝わる「河童駒引き伝説」とは、河童が馬を川に引きこもうとするが、庄屋に見つかってしまふ。河童が謝るので許してやり、その代わりに高塔山の石地藏に釘を打ち込み、その釘がある間は決して悪戯をしないと河童に誓わせるものであった<sup>②</sup>。

葦平の兄弟はみんな父から河童にまつわる伝説を小さい頃から寝物語に聞き、その不思議な妖怪に興味を持っていったよう描いている。玉井政雄は、次のように言う。

「私が河童が好きなのは、小さいとき父母からよく話を聞かされたからだろう」

と兄は書いている。だから、私は、「兄が小説家になったのは父が作り話の名人だったからでしょう」

冗談のようにそう答えるのである<sup>③</sup>。

葦平が河童物語を描き続けるのは、幼き頃からの父母の影響

が大きい。父から聞かされた創作話が葦平の中で重要なものとなったのであろう。父の寝物語は知らず知らずの内に、葦平自身の創作意欲をかきたてたのである。なお、毎年、一月二四日の葦平の命日には、高塔山の「河童封じの地藏尊」の近くの葦平文学碑の前で、葦平忌が営まれる。そして、多くのファンが葦平を偲び、河童共和国のメンバーによる太鼓の奉納が行われている。

さて、本稿では、数ある葦平の河童小説のうちから「蕎麦の花」という短編小説をとりあげる。

「蕎麦の花」は昭和三〇年四月の『新潮』（第五二巻四号）に発表され、『蕎麦の花』（昭和三〇年六月、河出書房）に収録された。その後、葦平の生前には『河童曼陀羅』（前出）に収録されている。収録の際に目立つた書き換えはなく、「蕎麦の花」の先行論文も未だない。

「蕎麦の花」は、九州地方の河童伝説をふまえているが、伝承をそのまま描くのではなく、テーマに応じて創作している。また、本作を元に水木しげるにより、同名で漫画化されている。しかし、水木は意図的に葦平の「蕎麦の花」を変えて創作している。水木作品と比較し、また作品の原話である北九州の伝説をふまえながら、本作が表すテーマを論じていきたい。なお、

本稿では『河童曼陀羅』（前出）の「蕎麦の花」をテキストとする。

## 一、「蕎麦の花」における海御前伝説

「蕎麦の花」の冒頭には「川面にわたる風に乗つて、貴船神社の方角から太鼓の音が聞えて来る」と書かれている。この貴船神社とは、福岡県行橋市行事字貴船にあり、水神などをまつている神社である。伊東尾四郎『京都郡誌』<sup>(1)</sup>によると、この神社の起源は「文禄二年（1593）八月当村古賀九四郎兵衛といふ者、長門国貴船神の靈夢に感じて、創建せしが後正保二年（1645）に再建せりといふ。」（『本社末社旧記御改指上帳』<sup>(2)</sup>）とある。神社の写真をあげておく。なお、この行事の貴船神社には親神社があり、それは、同じく行



橋市行事七―一七―一にある正の宮正八幡神社である。正の宮正八幡神社は、森鷗外が小倉滞在中の明治三四年一月一五日に訪れたことを『小倉日記』に記しており、そのことでも有名である。

続いて作中には「盂蘭盆が近づいたので、村の若い男女が社の境内に集まつて盆踊りの稽古をしてゐるらしい（中略）香春街道の出はづれにある庚申淵に棲んでゐるお染河童にとつては、年変ることの楽しみの一つではあつた」とある。お染河童は、「香春街道の出はづれにある庚申淵に棲んでいる」ともあるが、香春街道は、北九州の街道の地名である。だが、その「出はづれ」には、「庚申淵」という淵はない。庚申とは、十干と十二支を組み合わせたものの第五七番目を指す<sup>(3)</sup>。また、庚申信仰とは、庚申の日を禁忌とする信仰である。道教の説で、庚申の夜、睡眠中に体内の三尸虫が逃げ出してその人の罪を天帝に伝えるというもので、虫が逃げぬように徹夜をするという風習であつた。この風習が日本では平安時代に伝わり、その後長く続き、後にサルを神使とする山王信仰とも結びついたと言う。なお、先の貴船神社の親神社正の宮正八幡神社境内には、「庚申塔」は点在している<sup>(4)</sup>。

榎本敏「伝説の島原（五）」<sup>(5)</sup>に、庚申神社にまつわる次のよ

うな伝説が紹介されているので、簡潔に説明する。とある淵から水を引いて住民が生活していたが、ある夏の土用の入りに水が止まったので、庚申神社に祈禱に行くと、三三日月の晩、夢に庚申様が現れて、田に水が行かないのは水神様の祟りだと言った。村人は孕み女を淵に入れて水神に奉った。彼女の恋人の僧が彼女を追って淵に投身した。その後、土用の入りから三三日月に淵から鐘が鳴るようになった。これは、長崎島原の伝説である。水神、すなわち、河童と庚申が結びついた伝説が長崎に残っているようだ。そして、この伝説は女と僧の悲恋の物語である。なんらかの形で葦平はこの伝説を知っていて、九州には「庚申淵」という淵はないが、「庚申淵」にお染河童が住んでいるという設定にしたのであろう。のちに、お染も悲恋の運命となるので、その伏線で「庚申淵」としたのかもしれない。さて、続いて「蕎麦の花」にはこのようにある。

河童も遊ぶことがきらひではないけれども、人間たちのやうにかういふ浮き浮きした度はずれの祭はやらない。ことに、お染をふくむ北九州界隈の女河童は、いづれも源氏に亡ぼされて関門海峡に沈んだ平家の女官であったから、敗戦と滅亡の悲しみがなほ尾を引き、なにかの歓楽に底抜け

にうつつを抜かすといふ気持ちになかなかならないのだつた。

お染河童は、人間の祭りに憧れながらも、自分たちが元は源氏に亡ぼされた平家の女官であったことで、悲しみを常に抱いていた。また、きれいな娘に「化ける術」も知らないで、踊りの輪の中に入ることもできず、ただ、「変化の法を知らないことにさびしさを感じ」ながら、「神社の境内の賑はひを眺めてゐたのである」。

ここにある、「お染をふくむ北九州界隈の女河童」が「関門海峡に沈んだ平家の女官」であるとは何を指すのか。作品は次のように続く。

壇の浦で亡びた平家一門のうち、男は平家蟹となり、女は河童となった。その女河童たちは能登守教経の夫人であった、海御前によつて統率されてゐる。海御前は門司の大積村にある乙女岩に本拠をかまへ、ことあるごとに部下を召集して、さまざまの指示をくだす。毎年六月一日に定期総会が行はれた。

「壇の浦で亡びた平家一門のうち、男は平家蟹となり、女は河童となつた。」というのは、北九州で昔から知られた伝説である。須田元一郎は「九州北部の伝説玩具」で次のように記している。

企救郡松ヶ枝字村 大積に天疫神社といふ祠がある。こゝは、平家の大将能登守教経の奥方が、壇の浦の戦で破れた時波間に投じ、こゝの海辺に流れ附いたのを、里人が祀つたと謂れてゐる。この女が神となつて、海御前様と呼ばれ河童の総元締になつた。<sup>9)</sup>

平家の勇猛な武將能登守教経の奥方が、入水自殺を遂げ北九州市門司区の大積海岸に流れ着き、河童となつて大積天疫神社に祀られた。そして、共に死んで女河童となつたもと平家女官たちの総大将海御前と称されるようになった。葦平も、この海御前伝説に興味を持ち、この伝説を元に河童小説「海御前」〔『文学界』昭和二六年一月〕「白き旗」〔『新風土』昭和一五年九月〕などを描くと共に、次のエッセイを残している。

大積は門司市街の裏手にあたるさびしいところであつた。この海岸に、能登守教経の奥方が屍体となつて流れつい

たのを、村人が厚く葬つた。海御前はその化身だということになつてゐる。

悲壮な源平合戦はさまざまの美しい物語を生んでゐるが、一ノ谷、屋島、壇ノ浦、と西へ西へと逃がれた平氏も、ついにここで亡び、海底に沈んだ男たちはハイケガニとなり女官は カツバになつたと伝えられている。その多くの女カツバたちはすべて海御前の指揮下にあるわけだ。<sup>10)</sup>

ちなみに、大積天疫神社には今現在も海御前の像が置かれてゐる。これらの海御前伝説を本作でもうまく作品に登場させてゐる。作品は以下のように続く。

海御前はそのときどきの情勢にしたがつて、いろいろの指図をしたが、いつの会合のときにも変らぬことが一つあつた。それは憎い源氏に対する恨みである。(中略)

「お前たち、なんでもかんでも源氏につながるのあるものには、かならず仇を討たないと、平家一門の顔にかかはるぞ」  
と、まるでやくざの女親分のやうに、凄い啖呵を切るのが常であつた。

この部分も、次の伝説をふまえていることがわかる。

毎年五月の節句になると、御前様は河童族を集め「今日からお前たちを自由にしてやるから、白いものや笹に關係あるものに出会ったら、水中に引き入れてしまえ、ただむやみに人間や畜類の生命をとってはならない。秋風が吹き出して涼しくなりソバの花が咲くころ、急いで戻ってこい」と、解放された河童族は、思い思いに川や池のほとりに出かけ、源氏に關係のある者に害を加えて、秋に帰ったときに恩賞を受けることになっていた。<sup>1)</sup>

平家の旗印は赤、源氏の旗印は白である。だから平家の末裔の女河童の頭領海御前は、もろもろの平家一族の女河童を集めて、源氏に關係する白いものをみたら、水中に引きずり込んで溺死させるように命じていたのである。

さて、作品に戻ろう。お染河童は、「海御前から特に愛されてゐた」ために、「関門海峡の海底から」この庚申淵に移されたのであった。庚申淵は、水が澄み「青水晶」のようで餌も豊

富だったために、お染河童は、庚申淵に越してきてから一か月も経たぬうちに「肥え太った」。それは、「大勢あるとかならず起る感情問題やいざこざ」なく、「のんびりと自由だった」からでもあった。だが「ただ一つの欠点は孤独であるといふことだけだった」。

## 二、お染河童と与左衛門狐との出会い

作中ではお染河童は、「心のやさしい河童」と設定されている。夏になつて「長峽川、検地川、庚申淵等で泳ぐ子供たちがけつして濡れないやうに見守つた」。しかしいくら気を配つても溺れることがたまにあり、「お染は神通力の恵まれてゐないことを悲しみ、死んだ子供のために涙を流した」。そんなお染河童の気持ちも知らず人間たちは、「河童の畜生奴、子供を引きこみやがつて」と罵倒した。ここにある、長峽川は、現在も福岡県行橋市下検地にあることから、「長峽川、検地川」は、福岡県行橋市の地名とみて間違いない。福岡県行橋市の地名が作中に所々使われている。さて、貴船神社境内の盆踊りは夜更けになつても益々「賑はひを増して」いた。

盂蘭盆には人間には特別の楽しみがある。若い男と女との自由な交歓である。お染も年ごろになつてゐたから、人間のさういふ青春の営みを見て心が疼かないでもなかつたが、自省心に富んでゐたので乱れるやうなことはなかつた。

太鼓の音、人間の歌声のどよめきが聞こえる中、お染河童は土手に座り膝を抱えてこの光景を眺めていた。ふと一匹の狐がこちらにやつて来た。お染河童は、奇妙なことをやりはじめた狐を隠れて見ていた。狐は川で顔を洗い、水を数滴飲んだ。

狐はそれから北斗七星をふりあふいで、なにかを祈るやうな恰好をした。次には叢のところに引き、しきりに草を引き抜いて自分の身体にくつつけはじめた。草で身体中が掩はれるほどになつたとき、お染河童は瞠目した。もうそこには狐などは居らず、一人の美しい青年が立つてゐるのであつた。元禄絵巻から抜け出して来たやうな若衆であつた。

狐は美しい人間の青年に化けたのであつた。そして、青年は貴船神社の盆踊りを眺めながら自らも踊り出した。この北斗星

を仰いで美しい青年に化けるといふのは、作者葦平の若いころから好むところである。葦平は、詩集『青狐』<sup>(12)</sup>を発刊しているが、その中の詩「北斗星」で、あおぎつねが、「うつくしい童子に化けようと思ふ」がなかなか北斗星を見られず化けられない。それでも諦めず北斗星を探そうとする場面が描かれている。さて、お染河童は「うつとりと見とれ」、土手を降りて「今晚は」

と挨拶した。青年はお染河童の事を「性質のやさしい、またみめ形も美しい女河童」として既に知っていたので、「いくらか照れた」。そして自ら狐は「草野に棲んでいる者で、与左衛門と申します。どうぞ、よろしく」と挨拶をした。続けて、「(前略)一度お逢ひしたいと考へてゐたところでした。今夜はからずもお目にかかれて光栄です。おつきあひ願ひます」と述べた。お染河童も「こちらこそ」と応じ、一気に付き合い始めた。こうして、お染河童は、「一挙に与左衛門によつて」孤独から解放された。与左衛門狐も「魅力に富んだお染を愛して、二人の仲は日とともに濃厚になつて行つた。その結合は自然であつた」。お染河童は自分の魚のような生臭い体臭のために嫌われるのではないかと悩んでいたが、それすら与左衛門は気になるところか「お染さんの身体は全体がまるで伽羅のやうですね。実にすばらしい匂ひがする」と言つて「溺愛した」。

その匂ひはかへつて官能を刺激するものとなつて、二人の愛慾のいとなみは野放図なほどだつた。お染はもう盃蘭盆の人間たちの青春図絵を見ても羨ましがらる必要はなくなつた。

こうして、お染河童と狐は熱烈に愛し合つた。お染河童は「眷屬のちがふ動物同士の恋の意味や、伝説の捷のきびしさや、先々のことなど、いまはなにひとつ考へることはせず、現在の幸福に溺れきつた。お染には祕密ができたのである」。

さて、この話は、実は北九州行橋市に伝わる伝説をもとにしてゐるので、その伝説について記していきたい。なお、作中の草野という地名も、行橋市にある場所を指す。京筑民話の会『ものがたり京筑』の光畑浩治「与左衛門」には次のように記されている。

行橋市草野の正八幡神社の境内は、大きな楠や樫が何本も聳え、回りの真新しい住宅街の中にあつて「神の杜」にふさわしいたたずまいを見せている。かつて、草野は森と原野と田んぼであつた。人里離れた森の中、キツネが居たつ

て不思議はない。長峽川の清流に泳ぐカッパの勇姿を夢みたつて、おかしくはない。そんな草野の昔語りには、耳を傾けてみたい気がする。

五月の水神祭がくると、門司の大積の海御前のもとから、カッパたちがいろんな所へ行つたそうです。ここ長峽川にも何匹もやってきました。ある日、草野の森に棲む与左衛門キツネが川の水を飲もうとしたところ、ちょうど泳いでいたカッパに出会いました。名はお染さん、互いに一目惚れした与左衛門とお染の恋が始まりました。<sup>(13)</sup>

火野の「蕎麦の花」でも、与左衛門狐が水を飲もうとしたところで、お染河童に出会う描写があり、光畑の言うような、行橋市草野に伝わる伝承をもとに作品がつくられたことがよくわかる。

### 三、お染河童と与左衛門狐の恋愛と与左衛門狐の負傷

お染河童と与左衛門狐は、恋に陥り、頻繁に会うが、もっぱら与左衛門が土産を持つてお染河童の住む庚申淵を訪れるのであつた。その土産は人間から奪つたものであつた。与左衛門は

お染が自分の住む草野を訪れることを嫌がり、来ないよう戒めていた。なぜなら、「庚申淵にはお染以外誰もゐないけれども、草野には狐や狸がたくさん棲んでゐるので、ひと目につきやすい」からであつた。

しかし、お染河童は、時々草野を訪れる。それは嫉妬心からで、「与左衛門がお染を草野に來たがらせないのは、草野に女房がゐるからではないか。女房でないまでも恋人でもゐるのではなにか」と考えたためであつた。しかしそれは、単にお染河童の「杞憂だつた。」「狐の仲間には異類と交歓してはならぬ掟があつたから、与左衛門はお染との仲がばれることに戦線競々としてゐたのである。」与左衛門を信用していても、お染河童の恋心はおさまらず「一週間も与左衛門が姿を見せないと、お染は矢も楯もたまらなくなつて、草野へ出張して行くのだつた。」

さて、ある三日月の夜、村の青年に化けた与左衛門狐は検地堤に腰をおろし、人間を待つてゐた。すると五〇位の百姓の醉漢が大声で歌いながら、いかにも豪華料理が入つていそうな大きな折詰をさげてやつてきた。「きつとどこかの大家で婚礼があつたものにちがひない」と与左衛門狐は酔っ払いに声をかけた。

「誰ちや、そんなところに居るとは？」

「貴船の勝太郎ですよ」

「貴船の勝太郎がそんなところになしとる？」

「月を見とりますよ」

「月見？　へん、あんな針金みたよな月を見てなんするか」

百姓は、不審に思い、勝太郎に化けた与左衛門狐を見た。「たしかに貴船の勝太郎にちがひないが、その勝太郎は川の土堤に來て月を見るやうな風流な男ぢやない。いま時分は判子を押しつたやうに、このごろ村にできたパチンコ屋にゐるはずだ。百姓はこの界限でよく狐から折詰をとられる噂を思ひだした。彼は力自慢で度胸もある男だつたので、この狐をひとつらへてやうといふ魂膽になつた」のである。それでなにげない様子を装ひ、折詰を「おい勝太郎、高門の祝言でたいそうな御馳走を貰うて來た。ちいと食はんかい」と言いながら、開けようとした。与左衛門狐も折詰を狙つていたので、渡りに船と思つて、「油断をしてゐた。いきなりつかみかかつて來た百姓のため、わけもなく、そこへ抑へつけられた。おどろいてはねのけようとしたが、まるで岩がのしかかつて來たやうな糞力だつた」。そして、あつけなく組み伏せられ、「おさへつけられた拍子に、神通力

がとけてもとの狐にもどつてしまつた。人間は、狐汁にしてやろうと「しぼるために自分の帯をときはじめた」が、「与左衛門の頭にばつとお染の顔が浮かんだ。すると身内に猛然たる勇氣がわきでて」、「渾身の力をふるひおこすと、岩の重しのような百姓の身体の下からはねあげた」。だが、相手もさる者で「狐をなほもしつかりと掴んで離さ」ず、格闘になつた。

二人ともそこら一面にある水たまりの中をころげまはつて、ずぶ濡れ泥まみれになつた。一度百姓は狐を深い水たまりのなかに押しこんだ。窒息させようと考へたのである。与左衛門は水中でもがき、したたかに泥水を飲んだ。息がとまりさうだつた。しかしまたお染のことを考へると、必死になつて暴れ、やうやく百姓の手から脱れることができなかつた。

こうして、与左衛門狐は、やつとの思いで人間から逃れ、命ながら草野の住処に戻つたのであつた。

#### 四、お染河童の看病と与左衛門狐の死

与左衛門狐が人間との格闘の末、怪我をしたことを全く知らないお染河童は、十日も与左衛門狐がやつてこないことを不審に思い、止められていたにも関わらず草野を訪れる。そして、与左衛門狐が「高熱を發して寝こんでゐるのを見て」驚く。

冷たい水たまりで泥水を飲んだため、風邪をひき胃腸病にかかつてゐるのだつた。そして、胃腸の方は治つたが、風邪がこじれて肺炎をおこしてゐた。格闘したときの傷痕が方々にある。与左衛門は瘦せ細り、声にも元気がなかつた。

お染河童はその姿を見て泣き崩れた。「この災難が自分に御馳走をあたへようといふ」気持ちからの出来事だと分かると、「どんなにしても自分が与左衛門の病気を治さなければならぬと決心した」。お染河童は与左衛門狐につきつきりで看病したかつたが、不可能だつた。なぜなら、草野は普段から人目が多い場所、その上与左衛門狐が負傷してからは、身を寄せていた「叔父一家の狐たちが入れかはり立ちかはり看病に當つてゐるため」、お染河童も容易に病人に近づくことができなかつた。

た。そこで、「二人はちよつとの隙をうかがつてはあわてふためいた逢ひびきをした」。

「とにかく早く全快して貰はなければいけないわ。あたし肺炎によく利く薬を持つて来てあげるわ」

次第に衰弱して死相さへ呈しはじめた恋人を救うために、お染河童は、胸の病を治すのに効くギンギユウという魚の黒焼きを食べさせることにした。ギンギユウは、「はえにちよつと似てゐる川魚」で、「二つの川にも庚申淵にもたくさんゐる。珍しい魚でもなんでもない」。ただ、「きびしい伝説の掟にしたがつて、獲ることを禁じられてゐるのであつた」。なぜなら、ギンギユウは、平家の旗印の赤旗の模様が、胸鰭にあるため、海御前は「わが平家にすこしでもつながりのあるものは大切にせよ」といひ、これををかすものはきびしく罰すると宣言し、ギンギユウを食べすることは禁じられていたのである。

その統領の言葉は恐しい。禁をかけた仲間がただちに十日間の絶食を命ぜられ、海御前の筈によつて百たたかれたことが数回あつた。ギンギユウのたくさんゐる庚申淵にお

染が移住させられたのも、お染が禁を破るやうな女ではないことを信用されたうへであることはいふまでもない。しかし、今お染は恋人の命を救ふため、悲壯の覚悟をしたのであつた。

お染河童は、禁をおかしてギンギユウをとつて黒焼きの薬にし、草野の与左衛門狐に運んで行つた。「効果はてきめんだつた。亡霊のごとく痩せ細つてゐた恋人はしだいに元氣を恢復し、熱も下がつて来た」。かなり回復した与左衛門狐は、お染河童の心づくしをきつと叔父も分かつて結婚を許してくれるだろうと、お染河童にプロポーズした。だがお染河童は、

「ちよつと待つて頂戴、あたしにも、すこし考へさせて」

「うん、無論、君の事を思つてのことだから、君にもよく考へて貰はなくちやならん」

「あたしの決心がきまるまでは、叔父さんには絶対に話さないやうにしてね」

と結婚には躊躇した。お染河童は、結婚など「形式主義だ。人間は形式主義が好きだから、馬鹿々々しく派手な婚礼騒ぎをするけれども、そんな愚劣なことが自分たちに必要だとは思はなかつた」のである。お染河童は、楽しい逢引きができるだけで、「孤獨から解放され、しみじみと生き甲斐を感じてゐる」。もしも結婚などすれば、「これまでの罪がみなばれる。お染はそれが恐しかつた。彼女はいまのまま美しいエゴイズムを通してゐたいのである」。そうしてお染河童はキンギウウの黒焼き薬をせつせと与左衛門狐に届けた。

キンギウウの効果はてきめんであつたが、全快するまでには一つの副作用があつた。キンギウウのため黴菌が死に、肺が正常な活躍にかへる前後、はげしい咳が出る。これを越せば全治する（中略）与左衛門にも恢復期が来て、はげしい咳が出はじめた。コンコンコンコンと、のべつ幕なしに出る。おさへようとしても止まらないし、努力すればするほど声が高くなる。

連続する咳の声のために、遂に附近の人間たちに気づかれた。

「（前略）狐ぢや。悪戯ばつかりする狐の奴、どこに棲んだりやがるかと思うとつたら、こんなところの穴に居やがつたんぢやな」

「いつか権六おつさんが高門の祝言の婦りに捕まへ損うたと話しよつたが、あのいたづら狐にちがはん。今度は逃がすな」  
こうして、村の青年たちは、狐征伐のため、穴のまはりに網を張りめぐらし、穴から出ても逃げられないようにした。それから穴の前に生柴を積み火をつけ、与左衛門狐を燻りだした。与左衛門狐は煙にむせ、とうとう穴から飛び出してしまった。すると、青年たちに棍棒で殴られ「血へどを吐いて死んでしまった」のであつた。

##### 五、北九州市行橋の伝説と火野葦平「蕎麦の花」

さて、これまで、「蕎麦の花」におけるお染河童と与左衛門狐の悲恋の物語について説明してきた。そして、この作品は、行橋市に伝わる河童の伝説をもとにしていることも指摘した。本章ではその伝説についてさらに詳しく記してみる。先にあげ

た光畑浩治「与左衛門」では、次の如く記されている。

長峽の河原で、草野の森で、愛を語り心を許す毎日を送っていました。ところが蒸し暑い夏の夜、川で一一緒に泳いだあと運悪く与左衛門が風邪をひいてしまったそうです。コンコンと咳をするのを見かねたお染さんは、いい葉はないかとあちこち捜し回りました。そのうち、川で捕れるギンギューという魚の黒焼きがよく効くと聞いて何匹もギンギューを捕って看病を続けました。それからというもの、ひともうらやむばかりの仲睦まじい様子が見られたそうです。しかし、笹リンドウやソバの花の咲く九月になると、悲しい日がやってきました。カッパの元締め海御前は平家の女性なのです。したがって、ソバの白い花が次つぎに咲くのは、源氏の軍勢が攻め寄せることを意味します。この季節には、カッパたちは海御前のもとに帰らなければなりません。

愛する同士の別れですから、心も濡れて涙も出ましよう。別れのその夜は、貴船神社のお祭りです。お染は、人びとのにぎわいと、明るく揺れるほんぼりの灯に送られて、長峽川を下って行きました。最後の逢瀬の思い出を胸に刻んで。

光畑によると、この伝説が行橋市に古くから口づてに伝わっていたが、残さないと行けないと考え、京筑民話の会のメンバーと共に『朝日新聞』に連載し、『ものがたり京筑』という本に収録したという。葦平も行橋市に近い北九州地域に住んでいるので、おそらくこの伝説を口づてに聞いていたのだろう。ただこの伝説は、葦平の「蕎麦の花」とはかなり異なる内容である。与左衛門狐とお染河童が恋をするのは「蕎麦の花」と同じだが、伝説では、「川で一一緒に泳いだあと運悪く与左衛門が風邪をひい」たために、お染河童が「ギンギューという魚の黒焼き」を与左衛門狐に食べさせ、看病をするという話だ。「蕎麦の花」のように、与左衛門狐が人間に殴られ負傷して肺を悪くし、お染河童が看病する話ではない。また「蕎麦の花」での、与左衛門狐がようやく回復した後、人間に燻し出されて殺されるといふ悲劇的な結末は伝説にはない。伝説では、蕎麦の白い花が咲く九月になると、源氏の旗印の白一面となり、平家の血統のお染河童は、海御前のもとに帰らなければならず、与左衛門狐と泣く泣く別れるという内容である。すなわち、五月から九月までの間の短期間の恋と離別が伝説の話である。与左衛門狐もお染河童も死ぬことはない。なお、この伝説は、和田寛『河童伝

承大事典」でも福岡県行橋市の項「狐に恋した河童」で次のようにとりあげられている。

昔、行事の辺りの川に「お染め」という牝河童が住んでいた。

ある時、近くに住む恋仲の「与左衛門」という狐が肺炎に罹って重体になったので、お染め河童は肺炎に効くという「ギギユウ」という魚を持って見舞いに出掛け、親身になって看病したので、ほどなく与左衛門狐は全快したという。

行事の「貴船神社」では、毎年九月一日、二日に「風鎮祭」を行い、狐と河童の図を描いた木製の風鎮を授与しているが、その風鎮は「お染河童」の話から創案されたものであるといわれている。<sup>(14)</sup>

和田寛も、行橋市に伝わる、お染河童と与左衛門狐の恋話を記しているが、光畑の方が二者の別れの理由まで説明している詳しい。また、行事の貴船神社では、和田の記すように、現在でも、立春から数えて二百十日目にあたる九月一日、二日に「風鎮祭」という「荒ぶる風の霊を鎮めて、風による災害を未然に防ごうとする」「風祭り」の行事が行われ、神楽の奉納が行われている。<sup>(15)</sup> 論者は、和田の記す如く、この風鎮祭で「狐と河童

の図を描いた木製の風鎮を授与」されているのかを親神社の正の宮八幡神社の広瀬文夫宮司に尋ねた。広瀬宮司によると、お染河童と与左衛門狐の恋物語は、あくまで行事の貴船神社での伝承であり、親神社の正の宮八幡神社とは無関係である。また「狐と河童の図を描いた木製の風鎮」の授与は、氏子の一部が一時自主的に行っていた時期があるが、神社が主体的に授与したことはないとのことであった。

話が作品からそれたが、他方、葦平の「蕎麦の花」は、人間が狐と河童の純粋な恋愛を邪魔し、さらに狐を殺すという、救いようのないほど悲惨な結末が描かれる。

「蕎麦の花」の終盤では、お染河童は、与左衛門狐の子を宿したことが描かれる。与左衛門狐の死を知らないお染河童はこんな様子だった。

産氣づいて動けなくなつてゐたため、お染はしばらく申淵の底で出産の日を待つてゐた。与左衛門のことが気にならなくはなかつたけれども、すでにギンギユウ薬で全治することは時間の問題であつたし、自分も愛人の子を産むためなので、次の逢ふ日のよろこびの大きさを考へながら、産褥に横たはつてゐた。

お染は大らかな幸福感に浸つてゐた。將來の設計などを考へてゐたわけではないが、子供の生まれることと、その子を見せて与左衛門に逢へることは、想像しただけでも微笑のわくことであつた。

こうして数日後、お染河童は幸福感で満ち足りたまま子供を産んだ。そして仰天した。生まれた子供は次のような状態だつた。

狐の顔の頭に皿があり、狐の身体の背中に甲羅がある。狐の足に水かきがつき、長い尻尾が生えてゐる。その醜悪さはいひやうがなかつた。鳴き声も不気味である。お染はぞつとした。暗愚なるものは河童である。愛慾の詩に沈湎してゐて、混血の科学には想到しなかつた。生んでみてびつくりしてゐるのである。

葦平の「蕎麦の花」はとことんお染河童を落胆させる。生まれた子供は醜悪で、さらにお染河童は出産後、淵を出て草野に飛んでいき恋人の無残な死に直面する。「暗愚なるものは河童である」という、突然登場する語りの言葉も真髓をついている。

お染河童は、与左衛門狐との恋に夢中で、全く、悲惨なことが起こるなど、考えてもいなかったのである。まさに「暗愚」そのものである。

人間どもは打ら殺した狐をかついで、意気揚々と村の方へ引きあげて行くところだつた。高らかな笑ひ声がお染の心臓を突き刺した。お染は涙も出ず、憤然と庚申淵へ引きかへして来たが、長峽川と検地川との合流点まで来たとき、愕然として毗をあげた。お染は見た。検地川の土堤のわき一面に源氏の白旗がたなびき、へんぼんと風にひるがへつてゐるのである。

恋人は人間に殺され、醜悪な子を産み、どん底に突き落とされたお染河童の前に、勝利者の人間の笑い声と、源氏の白旗がたなびいているのが見えた。平家の血を受け継ぐお染河童は、海御前の「源氏にかかはりのあるものにはすべて仇を討て」という言葉を思い出し、「絶望の勇氣をふるひおこして、源氏の白旗のなかに突入して行つた」。お染河童は、「その軍勢のなかを眼をつぶつてやたらにのたうちまはつた」。だが、源氏の白旗と思つていたのは、単に蕎麦の白い花が満開になつていただけ

けであった。

悲しみに打ちひしがれて曇つてゐたお染の眼に、ひろいそば畑が憎い源氏に見えたのである。お染があばれまはるので、そばの白い花が雪のやうにはね散らされたが、逆上してゐるお染も泥にまみれて傷ついた。そして、彼女はのたれ死にをするやうに、悲壮な戦闘の果てに死んでしまった。

お染河童は、狂気したようになって勘違いしたまま一人で戦闘し、最後傷ついて死んだ。「蕎麦の花」では、愛し合っていた狐も河童も、暴力や戦闘で死んでしまう。お染河童も与左衛門狐も死ぬという結末は、先に述べたやうに、鳥原の庚申神社にまつわる伝承の、愛し合う子を孕んだ女と僧の二人が死んでしまう話と重なり、お染河童が「庚申淵」に住んでいるという設定が伏線になっていたと肯けるのである。お染河童が死んだ後、何事もなかったやうに「川面をわたつて来るさわやかな秋風は、静かになつたそば畑のうへを吹きすぎ、白い花は鈴をふるやうにゆれうごいた」。自然は、人間や狐や河童などとは異なり、翻弄されることなく泰然としていた。作品の最後は、「河

童の肥料によつて、しだいにそばの黒い實を急速に太らせふやして行つた。」と結ばれる。死んだお染河童は、自然の肥やしとなつてしまう。ただ虚しさが残る結末だ。自然は、この悲惨な狐と河童の運命を素知らぬ顔で通り過ぎる。この最後の結末は、先に説明した、行橋の伝説にない悲壮なものであるが、何を表現しようとしたのであろうか。次章で詳しく考察する。

## 六、葦平「蕎麦の花」のテーマ

さて、本章では、作品を振り返りながら、本作のテーマについて考えてみる。

与左衛門狐は、お染河童との恋愛に夢中になり、つい人間から物を略奪して、お染河童が喜ぶやうに土産にする。与左衛門狐は恋に夢中なのかもしれないが、単なるエゴイズムに過ぎない。人間から見れば、人の物をかっぱらつたりするのは、悪事としか思えない。また、お染河童は、海御前という女河童の頭領に逆らうことができず、いつも自分の思うとおりに生きられない。献身的な看病を認め、もう叔父も反対しないだろうからと、与左衛門狐にプロポーズされても、異類と交わつてはならないという掟を破つた罪が海御前に発覚することを恐れて、お

染河童は「いまのまま美しいエゴイズムを通してゐたい」と考へる。すなわち、与左衛門狐もお染河童も愛し合っているが、お互いに自分のことしか見えていないのである。まさに語り手の言う「暗愚」なところであろう。こんな自身のことしか見られない者たちの、心の醜さの混血の象徴が、醜悪な子と言えないのではないか。悪いことをしていると思っていないくても相対的な視点で自身を振り返ることが大切なのである。一方、人間はどうだろう。狐が人間に化けて、悪さをするからと言って、ここまで狐を痛めつけていいのだろうか。狐を殴り負傷させても、まだ気がすまない。狐が「血へどを吐いて」死ぬまでせめ続ける。そして、後悔するどころか、勝ち誇ったように「笑い声」を立てたのである。ここに、人間が、戦闘、すなわち殺人を繰り返す縮図がある。許すことが出来ず勝ち負けで全てを決めようとする、人間もまた「暗愚」なのである。火野葦平は、次のように述べる。

飄逸でとぼけた動物であるはずの河童が、私の作品のなかではときに重苦しく、悲しみとなげきにとどざれすぎるところを指摘されたこともある。しかし、私としては河童のひとときのよるこびも美しさも描きたい思ひは切である。「暗

愚なるものは河童である」と数カ所で書いたけれども、私はその河童の暗愚さが滑稽動物である人間とどのやうに照応し、また背反しあつてゐるのかといふことを、特に諷刺として意識したことはない。私は私の河童が理屈っぽく、いやに諷刺的に、教訓的になることをいつでも警戒してゐたし、まして、幻想世界の夢見心地を人間の理論や感覚で打ちこはすこともつとも怖れた。きびしい伝説の掟に河童はしばられてゐても、人間の習俗とはかけはれたところに、河童の自由があるのである。<sup>16)</sup>

葦平は、河童作品を風刺としては描かないように意識しているが、「河童の暗愚さが滑稽動物である人間とどのやうに照応し、また背反しあつてゐるのかといふこと」は考えていたようだ。「蕎麦の花」は、人間と河童の共通点の「暗愚」さがわかる作品になつてゐる。最後、お染河童は、自分たちの頭領の海御前に、源氏の旗印の白いものを見れば、殺戮せよと言いつつに續けられて洗脳されていたので、ただ、蕎麦の花が大量に、満開に咲いているだけの花畑を勘違いし、その中に入って「縦横無尽にあばれた」。お染河童には「ひろいそば畑が憎い源氏の白旗に見え」たのだつた。そして「のたれ死にをするやうに、悲壮

な戦闘の果てに死んでしまった」のである。何とも悲劇的で「暗愚」である。このシーンに込められた寓意は何を表すのか。このシーンには、日本の戦前の、軍の様子と重なり合うところがある。源氏に倒されて滅びたことを、河童になつてからも恨み続け、「パチンコ」店が出来るような昭和三〇年の現在になつても、復讐の機会を狙つて命令を下す海御前は、まるで、戦時中の日本軍の上官のようだ。また普段から洗脳されていて、冷静な判断が出来ず、悲壮な戦闘をして死んだお染河童は、戦時中に戦陣訓に従わされ、洗脳を受けていた一介の名もなき兵士の姿に似ている。恨み続けることの無意味さ、さらには、誰かに従うのではなく広い視野を持ち、自身の判断で相対的に事象を捉え、物事を解決していく必要性などが本作には込められている。

本作のタイトルは、「蕎麦の花」である。満開に咲いたごく小さな蕎麦の花畑は何を示すのか。戦闘、恨み、復讐などではなく、目立たなくても、誠実に、質素に生きる、戦後の庶民の姿が集まった姿を暗喩しているのではなからうか。「河童の肥料によつて、しだいにそばの黒い實を急速に太らせふやして行つた。」のは、多くの恨み、エゴイズムから発した戦争の犠牲の上に、やっと平和をとりもどし、痩せ細つた大地に根付いて

生きる庶民が居るのだということを表しているのではないか。本作が発表されたのは昭和三〇年、ようやく高度経済成長に入していこうという現在、とすれば、また欲望に翻弄されて人間は突き進んでしまいがちだ。だが、戦後の何もない中で、蕎麦の花のように、質素に、ひそやかに、可憐に、日々の暮らしを大切に生きる庶民の姿に美しさと称賛の意味を込めて「蕎麦の花」というタイトルの作品にしたのであろう。

## 七、水木しげる「蕎麦の花」と火野葦平「蕎麦の花」

水木しげるは、葦平の河童作品群に興味を持ち、数点の作品を原話としてオリジナル河童作品を描き、昭和四四年から四五にかけて、『漫画アクション』に連載した。その一部である水木しげる「蕎麦の花」は、火野葦平「蕎麦の花」と同じタイトルで、昭和四五年三月一二日の『漫画アクション』に掲載された。そして、火野作品を原話としたこれら作品群を『河童膏』にまとめた。その後、日本文芸社・ゴラクコミックス『河童千一夜』他などに収録されていく。水木作品は本文が多少収録本により変更されているが、内容に関する大幅な改変はない。よつて本稿では、最初の収録本『河童膏』の作品本文を用いて

考察する。水木しげる「蕎麦の花」と葦平「蕎麦の花」は、大筋のストーリーはほぼ同じである。異なる点を中心に両者を比較して説明していきたい。水木「蕎麦の花」では、葦平の作品と異なり、海御前伝説をすべて除いており、お染河童と与左衛門狐の恋物語だけに焦点が絞られている。孤独だったお染河童が与左衛門狐に会って、孤独から解放され幸せな恋愛をするというストーリーとなっている。だから、お染河童は、平家の女官の末裔ではなく、海御前も水木漫画には登場しない。そのため、与左衛門狐が人間に痛めつけられて負傷した後、お染河童がギンギウの黒焼きで病を治すが、プロポーズされた時には、素直に受ける。葦平「蕎麦の花」のように、海御前を恐れることなどないのである。与左衛門狐の叔父に反対され、結婚は実現しないが、お染河童は子を産む。ただ、葦平「蕎麦の花」のように、生まれた子が醜悪などとは全く記されていない。最も両者の違う点は、ラストである。お染河童は出産後、家を離れ、人間に殺された与左衛門狐を見て、悲しみのあまり涙も出ないまま家に戻る。すると「大切な赤ん坊の姿がみえない」。なんと、赤ん坊は、人間に連れ去られていたのである。人間は次のように言う。

「とにかく大した拾い物だよ この河童の子を町の薬屋に持っていけば百両には売れるぜ」「黒焼きにしてすりつぶして飲めば 喘息の妙薬として引っぱりだこだよ」

「それにしても大した拾い物をしたよ」

「さ これから町に売りにゆくべえ」

水木はラストで、葦平作品にはない、人間が赤ん坊を誘拐して黒焼きにして売りに行くという結末を描いた。だが、黒焼きにするシーンは描かない。悲惨さは葦平作品の方が滲み出ている。お染河童は、赤ん坊の消息もわからず、与左衛門狐も死んで戻ってこない中で、また、前のように孤独に戻っていく。水木「蕎麦の花」は最後次の描写で終わる。

そんなことがあつてからお染はいよいよ孤独になりすべてを恐れ家でじっとしているようになった なんのことはない凡て弱いところへしわ寄せがいくのだ

彼女はまるで蕎麦の花のように小さく白く神社裏で老いて

ゆくのだった……

葦平「蕎麦の花」との違いは明瞭である。水木作品でも人間は狡猾で貪欲に描かれるが、お染河童の姿はあくまで誠実で素直である。お染河童は、愛し、愛された与左衛門河童と、二人で成した子の思い出を胸に、山里の奥でひっそりと、可憐に、質素で素朴に咲く蕎麦の花の如く、老いていくのである。最後までお染河童は死なない。哀愁は漂うが、読後感は、二者の満ち足りた純愛の思い出の余韻が残る。水木漫画は、お染河童を蕎麦の花の象徴としてとらえ、葦平作品を原話としながらも異なる解釈を加えて漫画を創作している。

### 終わりに

本稿では、葦平「蕎麦の花」を論じた。本作は、福岡県行橋市行事の貴船神社に伝わる、お染河童と与左衛門狐の悲恋の伝説をもとに創作されたことを述べた。また、お染河童は平家一族の血筋であり、その頭領海御前の傘下にいる設定になっている。北九州に広く伝わる海御前伝説がふまえられていることも記した。だが、葦平「蕎麦の花」は、これら北九州に伝わる伝

説を忠実にとり入れたわけではなく、伝承を踏まえながらも自由自在に創作していることを指摘した。本作は、伝説とは異なり、お染河童や与左衛門狐を不幸にすることで、広い視野で相対的に物事を見ることの必要性や、冷静に自分自身で判断することの重要性を描いている。さらに、本作は欲望に翻弄され、エゴイズムを貫いた果ての虚しさも活写されている。高度経済成長に入ろうとする昭和三〇年に発表された本作は、ともすれば忘れがちな、蕎麦の花がイメージする、素朴さ、質素さ、可憐さなどの美しさを、戦争で犠牲になった人々の上で成り立つ、戦後の庶民の姿に見出していることも考察した。他方、本作を元に、同名で漫画化した水木しげる「蕎麦の花」は、葦平の作品とは異なる解釈を加え、お染河童の純愛に、蕎麦の花のイメージを重ねていることを論じた。

葦平「蕎麦の花」は、実に短い小説ではあるが、北九州地方の伝説を綿密に調査し、それをふまえながらも、独自のテーマを加えた佳作だといえるだろう。

### 〔注〕

- (1) 玉井政雄『兄・火野葦平私記』(昭和五六年五月、島津書房)
- (2) この「河童駒引き伝説」は、和田寛編『河童伝承大事典』

(平成一七年六月、岩田書院)、劉寒吉・角田嘉久「福岡県の伝説」(昭和五四年四月、角川書店)、宮地武彦・山中耕作・荒木博之『日本伝説大系第一三巻 北九州編』(昭和六二年三月、みずうみ書房)などでも北九州市に伝わる伝説としてとりあげられている。

(3) 1に同じ

(4) 伊東尾四郎『京都郡誌』(昭和二九年一月一日、長田喬発行、非売品)

(5) 行橋市歴史資料館「行事 貴船神社」二〇一八年展示説明文

(6) 『日本国語大辞典 第二版』(平成一二年二月)平成一四年一月、小学館)

(7) 山内公二『新京筑風土記』(平成二九年三月、幸文館出版)

(8) 榊木敏「伝説の島原(五)」(『旅と伝説』昭和四年八月、第二巻八号)

(9) 須田元一郎「九州北部の伝説玩具」(『旅と伝説』昭和三年八月、第八巻八号)

(10) 火野葦平「三十年ぶりの門司」(『河童七変化』昭和三二年四月、宝文館)

(11) 1に同じ

(12) 火野葦平『青狐』(昭和一八年五月三〇日、六興商会出版部)

(13) 光畑浩治「与左衛門」(京筑民話の会『ものがたり京筑』昭和五九年五月、葦書房)

(14) 和田寛編『河童伝承大事典』(前出)

(15) 行橋市歴史資料館「風鎮祭とは」二〇一八年展示説明文

(16) 火野葦平「あとがき」(火野葦平『蕎麦の花』昭和三〇年六月、河出書房)

(17) 水木しげる『河童膏』(昭和四五年九月、双葉社)

本稿は科研費基盤研究(C)「日中、アジア・太平洋戦争とその連続性から見た火野葦平文学研究」における研究成果である。本稿を成すにあたり、行橋市歴史資料館の学芸員の皆様方、光畑浩治様、画家増田信敏ご夫妻様、正の宮八幡神社宮司広瀬文夫様に貴重なお話をご教示頂きお世話になった。この場を借りて御礼申し上げます。

(ますだ ちかこ/本学教授)